

愛知県がんセンター開設50周年記念特別企画公開講座(平成26年度第4回)のご案内  
「肺がん診療の現在と未来：肺がんサバイバー “いのちの落語”」

= 平成26年9月6日(土)開催 =

第1部 肺がん治療の最前線

〈 講師からのメッセージ 〉

「禁煙だけではない、肺がん予防の話」

肺がんに罹る日本人は、毎年9万5千人にのぼっています。日本人男性は、過去40年間のうちにタバコ離れが進んだために、肺がん発症率の増加が止まりました。これに対し、日本人女性では、喫煙率が横ばいであるにもかかわらず、肺がんの発症率が、一貫して増加しています。

最近、タバコ以外の肺がんの原因について、研究が進んでいます。本日は禁煙以外にも、肺がん予防に役立つ情報をお話します。

疫学・予防部 部長 田中 英夫

「ここまで進んだ肺がんの診断と内科治療」

肺がんの治療は近年急速に進歩しています。その理由としてドライバーがん遺伝子（がんの発生進展に強くかかわり、がんの生存が依存する遺伝子）が見つけれ、それぞれのタイプに適した治療法（分子標的治療）を選択する事により高い治療効果が得られているからです。また、近年、肺がんに対する免疫治療の開発も進んでいます。

肺がんの治療は、がんの遺伝子を解析し、個々の患者さんに最も適した個別化治療、つまりテーラーメイド治療を行っていますが免疫治療の開発も進みつつあり肺がんの飛躍的な治療成績の向上が期待されます。

呼吸器内科部 部長 樋田 豊明

「肺がん外科治療の最前線」

今や、肺がんは日本人の死因の第1位を占める難治の疾患です。がん病巣へのピンポイント攻撃が可能な抗がん剤（分子標的薬）や放射線治療（陽子線や重粒子線）の発達に伴い肺がん治療の戦略は変貌してきています。しかし、肺がんを根治する（完全に治す）ための手段としての手術の役割が減じている訳ではありません。がんの根治を目指すという手術の普遍的役割に加え、より安全でより体にやさしい（低侵襲）手術の提供が求められています。肺がんに対する最新の外科治療の在り方について紹介いたします。

中央病院呼吸器外科部 部長 坂尾 幸則